

「そこへ往きやるは孫さんぢやないかへ。」と聲かけたものがある。其聲を聞くと、大力自慢の孫二郎は寒さよりも、猶一層にぞつとして、思はず、そこへ居縮まつた。見ると其聲の主は女の乗物の内からである。戸が開いて白い顔がほんのりと見える。

「孫さん、知らぬ顔かへ。そりやあんまりぢやぞへ。」

斯う敵に名乗りかけられては、孫二郎も返事をせぬわけにはゆかぬ。

「薊か、どこへ往きやる。」

「久しう逢ひませんのう。汝のことぢや、右衛門佐様を尋ねたのでござらう。」

「そりや無論さ。して汝は。」

「私かへ、私もこれから右衛門佐様にお目通りするところぢやわいな。」

「お目通り致したらば、汝からも善う云うてたもれ。」とばかり、孫二郎はさつさつと行つてしまふ。

客 問

途すがら孫二郎は霧の中を徘徊ふ心地がする。同時に不安の念が徂徠して、たまらぬやうに感じた。一體あの女子は何のために畠山殿に逢ふのであらうか。自分の爲めか、それとも藤野からの内意を帯び

て、それとなく様子を探りに行くのであらうか。自分の爲めならばそれで善いが、又悪因縁の絆がつき纏ふ。藤野の内意を受けたとならば、悪因縁の絆はつき纏ふまいが、此身の讒訴やら悪口やら、ある事ない事を畠山殿に申すであらう。いづれにしても此身に取りては不利である。あゝ飛でもない奴に出逢つたと、しみく情けなくなる。しかし又考へ直すと、彼が畠山殿を尋ねに行たのを知つたは、或は禍を未然に防ぐ手段なるやらも知れぬ。とつをいつ思案に迷ふと、歩く途も殆ど無我夢中である。

どうしても孫二郎には善い思案が浮ばぬ。するとふと考へついたは遊佐八郎のことである。八郎には約束した儘久しう逢ひもせず、其約束も果さないが、もう八郎の味方であつて見れば、逢うて詫して、其智慧を借りても見たい。どうやら我身の上にも不安の風雲が急に起つたやうである。此頃聞けば八郎も今は歸參が叶ひ、館構へて時めいてゐること。其館は花の御所にも近い。儘よ、我から進んで其人の袖にすがらう。八郎より外に頼みとする人はないやうな心地がする。孫二郎は自分が不安の地位にあるを自覺すると、孤獨の淋しみを思はずにはゐられない。薊に對しては悔恨の念が熾である。なぜあんな悪魔のやうな女子と不義の快樂に耽つたか。其ためには兄將監をむざむざ城の没落ととも殺してしまつた。自分が今日不安の瀬戸に立つてゐるのも、畢竟は過去の罪惡がさうさせたのだなと、しみじみ思つた。薊を恐しく思つたが曾ては八郎にも不快な念を持つてゐた。それは云ふまでもなく若菜の色

を喜んだからだ。若菜に懇慕したから八郎を敵と見て之を殺さうとまで企てたのである。しかし今日の孫二郎は八郎の前に身を投げ出さうと決心したのであるから、八郎に對する敵意をも深く悔んでゐる。孫二郎はもう元の孫二郎ではない。唯一時不安な爲めに悔恨しようとするのでなくて、心から今までの行方の間違つたを自覺したのである。八郎の前に身を投げ出した時、八郎からどのやうに責められても、寧ろ之は當然であると信じた。斯う考へると、孫二郎は少しも躊躇はずに八郎の館を訪づれたのである。

八郎は若菜と靜に淋しい寒い夕暮を打語らつてゐた時であつた。

「長野孫二郎と云ふ仁が是非にお目通致したいとのことにござりまする。」と、取次のものが云ふ。

「何、長野孫二郎と申すか。それは異な男が参つたな。」と、八郎は眉を擧めたが、驚いたのは若菜である。

「あの嶽山に居りました、いやらしい男にござりまするか。」

「さやう、如何にも彼ぢや。いつやら藤野を誘き出さうと、某に約束しながら、それ限り梨の礫ぢや、或は藤野を釣り出す便でもあつて参つたのであらうか。」

「何の、あの男がそのやうなことと申せう。藤野を誘き出すと見せかけて、まことはお前を欺かうと致

すのでござんせう。かまへて彼が手段にお乗りなされますな。」

「そりや某も心得てゐる。釣り出されると見せて、まことは藤野を誘き出さう。先づ某が違うて善う引き出さう。」と、起ち上らんとするを、若菜は押止め。

「まア〜お待ちなされませ。お前が逢はしやんす前に私が逢ひませう。」

「そりや如何してぢや。」

「彼の虚か實かを試して見ませう。」

「おう、それもよからう。」

「其客人をあれなる客間にお通し申せ。」と、取次に云ひつけて、やゝあつて若菜は其室へと罷り越した。つくねんと火桶を前に坐つてゐた孫二郎の面前に現はれたのは遊佐八郎と思ひきや、曾ては道ならぬ懇慕をしかけた若菜であつたので、孫二郎は少からず胸を轟した。

「孫二郎殿、久しう逢ひませんでしたな。」と、若菜に先を越されて、孫二郎はいよ〜敗亡の體。

「おう、これは若菜殿でござりましたか。絶えて久しい對面にござりまする。」

「あの折は一方ならぬお世話になりましたのう。改めてお禮を申しまする。」

よう。けれど今は孫二郎は我身を八郎の前に投げ出さうとて来たのであるから、昔の戀人に對してもう一點の嫉妬も憎悪もない。穴あらば消えて隠れたいほどの思ひである。彼ははつと上氣して、「あの折は孫二郎飛んだ心得違ひを致して、何とも申譯がござりせまぬ。平に御容赦下されませ。」と思はずそこに頭を下げた。

けれど若菜は心に油断せぬ。此奴此やうな旨いことを云つて悔悟したらしう見せかけるのであらう。よし／＼其化の皮を剝いでくれよう。

「今は赤松殿に奉公しやさんすと聞いた。薊殿には始終お逢ひなさるであらうな。」
若菜の眼光は孫二郎の面を射た。

「それにつけて今宵鐵面皮ましくも推參致したのでござりまする。」
「そりやどうしてでござんす。」

「あのやうな毒蛇の口から運れたうて。」
「誰が毒蛇でござんすぞへ。」

「今では細川家の老女藤野に仕へまする野分の薊が、此某を仇とつけねらうて居りまする。不安の念はひし／＼と我身に逼りする。」と、孫二郎は手短かに今宵の一什一伍を物語つて、八郎の助けを求め

に來た由を明した。若菜は意外な感に打たれて之を聞いてゐた。

酒賣る店

すると襖が明いて、八郎の姿がそこに現はれた。

「孫二郎殿残らず聞いた。よし及ばすながら遊佐八郎が力になつて進ぜよう。」と、云ひながら、どつかとそこへ坐る。

「おう八郎殿、辱けなうござる。」

「如何さま汝のお云やる通り、汝の身の上は危い。畠山右衛門佐殿に逢うたと聞かば、赤松二郎必ず油断はせぬ。薊が佐殿に逢うたは何故とは知らねど、こりやてつきり藤野の指圖で薊自身の考へではあるまい。今の薊はもう汝に未練がないばかりか、汝に仇報へさうとしてゐるのは、定ぢや。ぢやがのう、今姑く赤松の家にて様子を見てござれ。某もそれとなく心を配り、汝の身の安泰を計らはう。危いと見たら、すぐさま逃げ出して某の許に參られるが善い。」と、八郎は快く之を引き受けた。孫二郎は數度頭を下げて、心から禮を述べた。

「さらばこれにて御暇申します。」と孫二郎が起たんとするを、八郎しばしと制し、

「今宵とて危い。赤松二郎は四相をさとする智者ぢや。汝の以前を知り居らば、畠山右衛門佐殿入洛と聞くといとしく汝の身の上をそれとなく探り居るであらう。今宵薊の地藏院に参つたのも藤野の指圖であらうが、其又上の指圖は赤松がしたやらも知れぬ。某は洛中洛外を警護する任でござれば、數多の配下が居る。今より早速に赤松の館、地藏院へ人を出してそれとなく様子を探らせうほどに、今暫く某の館にゐて、打語らうてゐやれ。」

と、八郎は此場をすべり出て、何くれとなく配下のものどもに云ひつけ、赤松の館へ、地藏院へと向はせた。

やがて程經て八郎の館に歸りついた配下の報告は斯うである。地藏院から一挺の女乗物が出たのをあつとをつけると、細川の館の裏門へと入つた。やゝ暫くそこに佇んで様子を伺ふと、又一挺の女乗物が裏門から出る。それと其のあとを慕ふと、赤松の館へと昇ぎ入れられた。

八郎は腕を携いて聞いてゐる。若菜は耳を傾けてゐる。孫二郎は眼を圓くしてゐる。

「其女乗物の主はやはり薊でござりませうな。」と云ふ孫二郎の言葉を打消して、八郎、

「否、某は爾か思はぬ。こりやてつきり藤野であらうがな。」

「えい、藤野でござりませうか。そりや如何して。」

「藤野が赤松殿と昵懇な間柄とは汝も知りやるであらう。よも薊を赤松殿の館へはやるまい。こりや面白うなつて來た。」と、八郎は獨り北叟笑む。

「藤野ならば某捕へてくれませうか。」

「むう、それもよからう。」

「某初見參の手柄を致し申さう。」と孫二郎は勇む。

「細川殿の老女を、將軍家の御内人が、しかも洛中洛外を警護する某が、何の理由なしに捕へたとあつては、そりや一大事でござる。藤野を誘き出さうと致したときも河原のものに沙汰して捕へさせるつもりであつた。さすれば今度も汝一人で見事ひき捕へて見やれ、唯某は配下のものに沙汰してそれとなく四邊を警めさせるであらう。引つ捕へた時には某別に善い手段がある。あの禍の根を絶たば、御臺所へ此上ない忠義でござるぞ。」

「高が老女一人、よし警護があつたとて五人十人投げ倒すはわけないこと。されば某直に路次に向ふでござらう。これにて御免下されませ。」と孫二郎は八郎の館を辭して外の方へと驅け出た。

大地は凍りついて、如法暗夜である。孫二郎は獨り飄然として赤松と細川との往來の路次へと向つた。小蔭に暫し佇んでゐたが、寒さは身を切るばかりで襟元はぞくぞくする、手も足も凍えるやうに覺える。

それで女の乗物とては一向に通る様子もない。

「こりや酷う寒い晩だ。待たるゝより待つ身になるなと下世話に云ふのは、まことちや。しかも戀だの色だのと云ふ興ある沙汰ではない。梅干婆の御通行を待つなんぞは、こりや氣の利かぬ骨頂ではあるわい。ちやが我が身に降りかゝる禍を絶やす、これも一つの手段。あゝ辛抱ちや〜。」と猶そこに佇んでゐたが、動くのでなく靜かにゐるのであるから猶更以て寒い。

すると、とある小路の戸の隙間から灯が見える。近寄つて隙間からのぞくと、これは酒賣る店である。店のうちの爐の縁に二人三人酒飲んで、高聲に打語つてゐるのが臙に見える。

「こりや好いところを見つけた。一つ二つ飲うべて寒さを凌がうぞ。」と、がらりと戸を開く。冷い風が内へ浸み入ると戸を明く音とで、内にゐた人々は一齊に振り返つた。

「酒一つ吞ませてくりやれ。」と、つと入つて戸を閉てる。

「此方へお入りなされ。」と、主らしいのが聲をかける。

「辱けない、此う云ふ折は火が何よりの馳走ちや。」と孫二郎は爐の方へ膝行り寄つた。

臙と室内には火の氣湯の氣酒の氣人の氣が立ち上つて、そこにゐる人々を、戸の方から急に入つた孫二郎は誰とも固より見定むる由がなかつた。侍であるか、商人であるか、それとも百姓であるか、

善くは分らなかつた。すると、爐の向ひ側にゐた男が聲をかけた。

「孫二郎ぬしではござりませぬか。」と、名を呼ばれて、孫二郎は、はつと驚いた。悪い處で知人に出逢つたなと思つた。其聲は誰とも判断がつかぬ。

「何誰でござるのう。」

「私ぢや、喜内でござりまする。いつやら暴風雨の夜さりえらいお世話になつた。」

あゝこれは飛んでもない男に出逢つたものかな。細川殿の奥へ仕へてゐる喜内であつた。如何さま獄屋破りして其人を助けてやつたのであつたが、其後は餘り逢ふ機會もなかつた。

「異な所で逢ひまするのう。」と孫二郎は笑つた。浪々と注がれた酒を孫二郎は一口に飲み乾しながら。

「寒い晩でござるのう。今宵は此處にどうしてござるのぢや。」と、孫二郎は何氣なく尋ねる。

「さるお人の餘所ながらの護衛にござりまする。」はつと思つたが、素知らぬ顔で、

「それはいかい御苦勞のう。其お人は誰人ぢや。」と、孫二郎は尋ねる。

「老女藤野殿が此方さんの奉公なされる赤松殿の館にお行きやつたので、路次を警めよと云ひつかつたのでござる。此やうな寒い晩にはいかい迷惑なことでござりまする。」

さては赤松の館への使者は果して老女藤野であつたよな。けれども細川家では路次をそれとなく護衛

してゐるのを見ると、こりや尋常の手段で捕へることは難さうであると、孫二郎は思はず胸を轟した。

千鳥の巻

女乗物

喜内の話で見ると、どうやら喜内は老女藤野の使命の趣を知らぬらしい。知つて居れば、孫二郎に藤野の護衛に就いては物語らぬ筈である。孫二郎はよし／＼と心に點頭き、

「夜に入つて、藤野殿が赤松殿の館に使者とは、そりや火急の用事でもござつてかろう。」と、先づ探りを入れて見る。

「さあどのやうな使であるかは、喜内とんと承知致さぬ。」

「野分はお伴に参らぬかのう。」

「野分は先程地藏院とやらへ参つた。それから藤野殿が火急に赤松殿の館へ参られたのぢや。」

さては遊佐八郎の推測通りであると、孫二郎は心私に八郎の先見に舌を巻いてゐる。

「野分が地藏院へ参つたとな。畠山右衛門佐殿と、細川殿とは仲が善うない筈ぢやが、そりやどうしていふぢや。」

「さあそこは善う分らぬ。あの新造の館で某が美事失敗てより以來、此喜内へは、とんと機密の話がござらぬ。ちやがのう野分は嶽山にゐたと聞いてゐる、其由縁で地藏院を尋ねたのござらう。」
大男總身に智慧が廻り兼ねて、近頃喜内へは藤野も一切機密を打語らはぬと見える。如何さまそれでは寒い晩に藤野風情の護衛を云ひつけられたも尤もである。こいつ欺してやらうと、孫二郎は手に持った大盃を喜内に指し、

「喜内殿、まことは某も赤松殿の仰せで、藤野殿とは知らぬが細川殿のお使者の歸路をそれとなく警護致せと云ひつかつてゐるのちや。今宵は某が引受けようほどに、お身はゆつくり酒飲んでゐたが善い。藤野殿の歸りを見送つたらお身に知らさうほどに、其折歸館致されよ。」
喜内は大盃に酒を溢るゝまで受けて、

「それは辱けない。あのやうな婆の警衛などは某とんと嫌ひちやが、これも主の命令ならば餘儀なうござる。今宵のことは孫二郎ぬし、お身に萬づ頼みませうぞ。あゝ有難や有難や。」
「して藤野殿の歸館はいつ頃ぢや。」

「亥の刻を合圖に赤松殿の館を出るとのこととござる。」
「さらばもう程もあるまゝ。」

「さあ孫二郎ぬし、今一つお飲みやれ。」
「辱けない。今度はお身にささう。」
指しつ押へつするほどに、先ほどから飲んでゐた喜内はもう大分酩酊の様子。妹に孫二郎に萬事頼んで、心が油断したと見えて、もう呂律も廻らぬ風情。
孫二郎もいゝ機嫌になつた途端に亥の刻の鐘が鳴る。主人は數へて、
「ありや亥の刻でござりまするぜ。」
「おうさうか。」と、孫二郎は起ち上り、酒代拂ひて、
「喜内殿、さらば参るぜ。」
「よ、よろしう、お、お頼み申します。あはゝゝゝゝ。」と喜内はひよつくり頭を一つ下げる。
孫二郎は表へ出る。酒氣を帯んだのであるから、冬の夜も何のその、さながら春風春水一時に到るやうに覺えた。
「誰ぢや。」と、底力ある聲が暗の中に響いた。孫二郎更に驚かす、
「誰ぢやと云ふのは誰だ。」
「長野氏ではないか。」

「さう云ふそなたは。」

「遊佐八郎。」

「おう遊佐殿でござつたか、これはく。」

「して今宵の首尾は。」

「さあ聞いて下され。」と孫二郎は小聲になりて、喜内のことを物語る。暗の中でも八郎は破顔微笑した
らたしく、

「それは興あることぢや。喜内は獄屋を破つて逃げ失せた罪人。よし引つからめて連れて戻らう。薊も
からめ取りたい。」と、しばし思案し、

「おう巧みな手段でからめ取らうぞ。さらば長野氏ぬからず藤野を。」

「そりや心得申した。」と答へを聞いたか、聞かずや八郎の姿は闇から闇に消えたらしい。

「あゝどうやら酔うたと見えて、目がちらつく、足元がよろよろ致す。」と、獨語しながら我とあはゝゝ
ゝと大笑し、

「何の、藤野のやうな毒碌婆を濟度致すはわけない事ぢや。」
折しも大路を一挺の女乗物が駈けて通る。

「おう、あれぢや。」と足を空さまに追ひついて、俄に作り聲。

「喜内がお迎ひに参りました。」

「そりや大儀やのう。」と乗物の中で聲したのは確に藤野。

「藤野殿、行く手にはちと怪しものが徘徊致すやうでござる。大廻りではござれど、鴨川ぶちへ道を
お變へなされませ。駕のもの、右へ折れて鴨川べりへ出たが善いぞ。」と云はれて駕籠昇きは右の小路を
折れる。

鴨川のせゝらぎは咽ぶやうに聞えて、折からに鳴く千鳥の聲が身に浸みるやうに哀れである。

「喜内殿く。」

「何ぢやいな。」

「まこと、そなたは喜内でござるか。」

「おう、さうぢや。」

「どうやら聲音が常日頃と違ふやうぢや。」

藤野は流石に奸智に長けてゐる。怪しと見てとつてか、聲高に不審がる。
「喜内でなうて誰であるから。」

「駕籠のもの急いで大路へ出たが善いぞへ。」

藤野はもう曲者と曉つたらしい。

「大路へ出ると承知せぬぞ。」

「何と申す。」

孫二郎はつと近寄つて、一人の駕籠昇きの襟首しつかと捉へた。

「曲者」とたちく後へ引かれながら駕籠昇きは叫んだ。

「えゝ面倒な。」と孫二郎は駕籠昇きを大地へ投げる、途端に乗物は覆へる、拍子に藤野を乗せた儘、乗物は覆車の苞、二つ三つ大地にもんどり打つて、鴨川へと眞つ逆様。

「あれツと。」疝走る聲が、闇の中に鋭く聞えた。

質屋の男

喜内はもう酔ひ潰れてゐる。

「はゝゝゝゝゝ。よ世の中と云ふや、やつア、う旨くいつてゐるもんだ。こ、斯うさ寒いば晩には、お己れに代つて、ば番をしてくれるものがあるんだから、せ世話はなしさ。げえーぶ。」と舌舐めすりしな

がら、またちびりく飲んでゐる。

「あゝ減相もない寒い晩だ。」と、そこへ表の方から飛び込んで来た一人の男がある。どこかの商家に奉公でもしてゐたらしい人體。

「旦那ごめんなすつて下さいまし。」と喜内のすぐ隣へ坐る。

「て手前は、な何商賣だ。」と喜内は押柄に酔眼で睨めつける。

「へゝへゝ、私は質屋稼業を致して居りまする。」

「な何んだと、し質屋のほ奉公人か。し質商賣とも申すものは、よ能いり利得がある」と申す。ちとて手前、身共の呑代を貸せ。」

「へゝへゝ、戯談ばつかし、お云ひなされますな。どう致しまして土倉税が莫大でござりまするによつて、質屋の利得なんぞは手薄にござりまする。」と男はお辭儀をする。

「ははゝゝゝ。う、旨いうろそ云つてけつかる。ち、ちつとぢやない、み、みんな、そ其り利得を此へ、だ出してしまへ。」

酒が云はせる高調子で、喜内は商人と見校つて、しきりに太平樂を並べてゐる。

「旦那、大へん好い御機嫌でござりまするな。お邸はいづれで。」

「み身共か。ままた當てゝ見る。」

「さやう山名様でござりまするか。」

「なな何んだと。や山名と申し居つたな。うろたへるな、は憚りながら、ああのやうな、あ赤入道のけ家人ではないぞ。えゝむ胸裏のわ悪いこつちや。」

「あゝさやうにござりまするか。さらばどこの御内人であらうか。どうやら此方様には見覚えがあるやうぢや。」

「み見覚えがあるとな。み身共は、ままだて手前のと處へは、し質物は、ち持参致さぬぞ。」

「あゝ分つた。お前様はもと伊勢守貞親殿の妾新造と云ふお人の館にお仕へになつて居りましたな。」

「な何ぬかす。こいつよ好い加減のことばかりも申し居るな。み身共は、さ前管領は細川殿のみ御内人でござるわい。」と、喜内は肩を怒し、目をむいて威張つて見せようとするが、ぐにやりと、意氣地なくそこへ平太ばる。

「さやうにござりまするか。いつやら新造の館の表で縛められた男がござつたが、旦那に善う似て居りましたぞ。」と云つて男は正面から喜内の顔を見る。すると生酔本性違はず、喜内の顔は見る見るうちに眞蒼となり、

「み身共は、そのやうなことは、し知らぬわい。」とつぶやくも口の内。つと立ち上つて、

「み身共はもう、歸る。て亭主、これを預けて置くぞ。」と小粒一つ投げ出してよろめきながら、表の方へ出ようとする。

「お危うござりまするか。」と、亭主は聲をかける。質屋と名乗つた男もひらりと座を離れ、追ひすがりさまたに喜内の襟首を捉へると、えいと一聲地上に投げつける。

「あゝこれはまあどうしたこつちや。」と亭主は蒼くなる。投げつけられた喜内もくわつと怒つて起ち上らうとする。

「ううぬ、す素町人のくせに、よ善うもくみ身共を、な投げをつたな。」とわめくを聞かばこそ、質屋と名乗つた男は天にも轟く大音聲

「獄屋破りの罪人を召捕つたるぞ。某ことは町人にあらず、洛中洛外の警護を司る遊佐八郎殿の配下にてあるぞ。亭主を始め人々驚く勿れ。」と呼ばはりながら呼子の笛を吹き立てると、外の方より組子四人ばら／＼と戸の中に亂入して、喜内はあはれや縛めの身となつた。

「あゝ、ここのりや、こ斯う云ふ筈ではなかつたが。」と引つ立てられながら恨めしげに左右を見返る。あとに取り残された亭主其他二三の人々、

「ありや重い罪人であつたか。危いところで我等も巻き添へとなるのであつた。」と云ひはやす。圖部六
圖部八となつたる喜内は、酔ひも一時にさめて引かれ行く後姿は、悄然として殊に寒さを感じる。

牢 舎 へ

「野分殿く。」と呼ばれて、野分はつつけんどんな返事。

「何ぢやい、喧しい。」

「ほう、怒らしやつたのか。此方さんに火急の用があるから、呼びましたのを、どうして、そのやうに腹立しげに云ふのぢやのう。もう善い、其用事の取次はせぬ。」と赤ら顔の、善う肥えた侍女は一層顔を眞つ赤にして、ぶんく、火のやうになつて怒りながら、元來し廊下へと引返す。火急の用ありと聞く
と、聞かすには居られない。

「太蘭さん、何ぢやいな。火急の用なら早うちやつと云はんせぬかへ。」

「知らぬく、聞きたうもない人に云ふには當らぬ。」と名詮自稱の太蘭は横肥りの體を動かしながら怒り切つてゐる。それでも話さぬわけにはゆかないから、知らぬくく云ひながら立ち去らうともせぬ。話さぬわけにゆかないのは、藤野からのあとの祟が恐しいからである。

「其やうな意地の悪いこと云はんすもんぢやないぞへ。私アさつき地藏院から歸つて来てから、つい氣色が勝れぬ故、腹立ちげに物云うておう氣の毒や。怒らすにちやつと話してたもれ。」と野分は猫撫聲を出すと、太蘭は、

「藤野様からあんたを迎ひのものが来た。早う野分殿に赤松様の御館まで来てくれよとのことや。ちやつとお行きなされ、私の用はこれだけぢや。」と云ひ置いて、すたく廊下をかけて行く。

藤野殿からの火急な使とは何か知らん。今日は地藏院に畠山右衛門佐殿を尋ねた。それも自分から進んで行つたのではなく、藤野殿の命を受けたのであつたが、其返り辭を云ふと藤野殿は早速に赤松の館へと出向はれた。藤野殿は此野分が無うては、善う赤松様に話が出来ぬのであらう。唯今のお迎ひは此妾を請じて、さまざまの魂膽を碎かうと云ふ所存であらう。よし／＼さらば参らうか。それにしても寒い晩ではあるわい。

自惚心の強い薊の野分であるから、大得意にて仕度に取りかゝる。

「赤松様は名高い美しい少年ぢやと聞いてゐる。將軍様も此お人がなうては夜も日も明けぬとやら、又細川様も此お人を二なきものに思召してござる。どのやうな殿御かは知らぬが、今宵妾が直にお目通り致すのや。おう恥かしやのう。藤野殿のやうな梅干婆よりは、妾の方がすつと若うて美しい。ちつとは赤

松様のお目にも止まるであらう。ちと念入りに化粧など致さうかい。」と身の程知らずの野分は鏡臺に向つた。すると、又太蘭が慌しう駆けて来る。

「野分どの、矢の催促や。一時も遅うなつては一大事だと吐かし居る。え、何ぢやい、あんたは此火急に化粧三昧か。おういやらしいやのう。」と、あとは、あたり構はず大口開いての高空ひ。野分むつとなり、

「何を笑うてゐやる。無禮ぢやないかへ。赤松様のやうな貴人のお前に出るに化粧の嗜みして行くのが何で可笑しい。ちと氣を注げしやんせ。」とやりこめる。ところが相手もさるもの、やりこめられて其儘ひるむやうな女ではない。

「何や、身嗜みやと、こりや可笑しい。御殿奉公するもの、身嗜みは常日頃二六時中してある筈や。殊に今のさつきあんたは畠山様のところへ行かしたと聞いてゐるに、今になつて何の化粧に及ぼう。あゝ讀めた。赤松様が美しいもんやさかい、あんたは綺麗にして行かうとするのであらう。おほ、おほ、おほ。」

豫慮會釋もなく、敵の急所を衝いて置いて、

「そんなら無益や、やめにしたが善いぞへ。あんたのやうな顔に何で赤松の殿様が見惚れるものかいな。」

自惚も大體にして置くがよいぞへ。」

これは又手厳しい攻撃振り。如何な鐵面皮の野分もこれには言句が塞つてもう云ふべきすべも知らぬ。赤くなり、青くなり、手はぶるゝと震へ、眼は吊し上つて、背中には冷汗がだくゝ。

「覺えて居や。」と、唯一聲、それも咽喉から締殺されるやうに振り絞つた。

太蘭はからゝと打笑つて、

「そのやうに怒るもんぢやないぞへ。それよりはちやつと行つた方が善い。遅なると、あの藤野様がどのやうな恐しい眼つきして睨むやらも知れぬぞへ。其時になると、私を怒るところではない、有難い辱けないと拜むであらうぞへ。」とまた弄にかゝる。

「え、胡蠅い。此石臼めが。」と此方はもう躍起。石臼と罵られると、元來が怒り易い女子のことゝてまけてはゐない。

「何だ、もう一度云つて見や。」

「横肥りの石臼見たいな女と云うたが何や。」

「河内の木樵女が何吐かす。」

双方眞つ赤になつてつかみかゝらうとする時に、

「これ何してゐやるぞ。野分どの、迎への駕籠が待ち兼ねてゐるぞへ。」と留女に一喝されて、野分は不勝無精、

「追つて戻つてから此片をつけるぞへ。其時に泣顔すなへ。」

「泣顔はお前の性分やらう。」との悪口聞きながら、野分は迎ひの乗物に乗つた。

間の中を乗物は一散に駆けて行く。野分は怒りながら震へながらにゆられて行く。やゝしばらく行つたと思ふと、或る處の門を入つたらしい。

「おう赤松様の館へついたげぢや。どのやうな美しい殿御である、早うお目にかゝりたい。」と、俄にぞくぞく悦喜してゐる中に、間もなく、乗物は下へおろされる。乗物の戸は明いて、

「さあお出なされ。」と云はれるまゝ一足二足入る。

「これがお館か、いやに薄暗うあるわい。」と中へ進むと、乗物は素早く昇き上げられた。同時にがたりと音がしたかと思ふと、部屋が閉まつたらしい

「はてな出迎ひの人も見えぬ。案内人も居らぬ。」と不審がりながら、

「案内頼もう。お取次を頼みまする。」と呼べど、怒鳴れど、一向に出る人も迎へる人もない。

「こりやどこや、はて面妖な。」とそこら中をじろく眺めて見ると、これは如何に、いつやら鎖され

てゐた獄舎と同じらしい。

「あつ。」と驚いた餘り、野分はそこへ尻持をついた。すると薄暗い中から、

「唯だ、そこへ来よつたのは。」と、うめくやうな聲がする。

「えゝ氣味が悪い。」と、あと退さらうとしたが、腰が抜けてゐるから、泰然自若動かさること山の如しと云ふ體たらくであつた。

むく／＼と奥の方から起き上つて來たものがある。薄明りにすかし見て、

「野分どのではないかへ。」

「さう云ふ汝は。」

「喜内ぢや。」

「あツ、お前もやはり囚はれの身かへ。」

これは又異なる處で逢つたものかな。

藤野は乗物諸共眞つ逆さまに鴨川の流へと落ちた。めつたやたらに手探りで乗物の戸を引き明けると遠慮なく冷たい水が流れ込む。もう夢中であるから、寒さなどは感じない。這這の體で這ひ出て、暗の中をやつと河原へにじり寄ると、ぱつたり倒れた。けれども氣丈の女であるから、氣を取り直して無我夢中で河原を一散に駆ける。危いところから一足も早く逃げ出さうとするのである。それが河下か河上かは一切知らぬ。暫らくの間は、小石に蹴躓き、轉けつ、まろびつ、二三町は夢のやうに走つたが、又流れを涉つて、鴨川土手へのぼり上つた。曾ては吹雪の夕に若菜が苦んだ其土手を、時雨降る夜に、藤野は無我夢中に辿つたのである。因果の小車が早くも廻り來つた造化の精妙には驚かざるを得ない。土手へ上りつくと、寒さの爲めか、驚きのせむか、又ぱつたり倒れて、此度はしばし起き上ることも得せず、柳の枯枝が風にそよいでゐる其下で唯うめいてゐた。

刻一刻に寒氣に鎖されて、危くもそこに凍死ぬところであつた。

「うめく聲が致す。人か犬か。」と、近寄つて不思議がるものがあつた。

「どうやら人らしい。これは如何してぢや。おう女の老人らしい。持病の癪に閉されてか、但しは寒さに凍えてか、下河原まで行けば知るべもあるから、背負つて進ぜよう。」と、深切にも肩をさし出すに、うめくやうな聲で、

「どなたかは存じませぬど、辱けなうござりまする。」と、藤野はやう／＼にして其肩に手をかける。

「どつこいしよ。」と其人は輕々しく背に乗せて、すたこらと鴨川土手を右の小路へと曲つた。

藤野は背負はれながら、夢うつゝの間に何ものであらうと推測してゐた。やゝ暫く行くと、どうやら出家人のやうに思はれて來た。身に纏うてゐるのは墨染の衣らしい。頭は圓めてゐるらしいが、何やら被つてゐるげぢや。一つ試に問うて見ようと、やつと心に案じ、又うめきながら、

「あなたは御出家にござりまするか。」

「は、アさやうぢや。」と唯言つたきりである。藤野は細川家の名を持出して、そこへ連れて行かれたいが、持ち出せぬは、途次の危険である。赤松の館を出ると僅かにしてあの災難である。細川の館の附近の恐しさも思はれてならぬ。儘よ此宵は此出家の世話になりて、明日つとめて細川家から迎ひをよこしてもらはうと思つて、出家のなすが儘に背負はれて行く。

殊に寒さは寒し、河の水に濡れてはゐる。河に落ちたときに、そここゝを打つてゐる。足もすりむき膝頭にも負傷してゐるらしい。歩かうにも歩かれぬ。それにしても此出家、大力と見えて、藤野を背負つて、少しも苦しさをうな様子がない。輕々と背負つた儘、足も極めて早い。

物の半時も歩いて、とある横路の寺の潜戸をあけて中へ入る。

「おうい。」と大聲に呼ばはると、寢惚けたやうな聲で、奥の方で、
「誰だへ。」と、云ふ。

「わしぢや〜。戸を開けてくれぬか。」とわめくと、やつと兩戸が開いて、燈がさした。
「おう、これは〜白眼坊でござるか。何ぢやい、その背にしてゐるものは。」

「人ぢや、女ぢや、女ぢやが老人ぢや。」と縁へ藤野を下す。

「これはいかなこと、びしよ濡れぢや。どこから連れてござつた。」

「鴨川土手から拾うて來た。棄て置くて凍え死にさうでござつたから助けて參つた。」

「それは奇特ぢや。さあ老女、早う爐にでもあたつて、衣を乾かさつしやい。」

「辱けなうござりまする。」

出て來たのは同じく出家人で、此寺の大和尚と覺しい。
藤野は四邊を見廻すと、大きな寺ではあるが、餘り立派でもない。

「寒いに依つて、下男や弟子どもはもう寢かしたが、幸ひ爐には火もある、白眼坊も暖まらつしやい。」

「此客を棄て置いては、愚老が迷惑ぢや。」

「預けて置かうか。」

「どうやら身分のある廻らしい。御殿奉公の身ぢやさうな。さあ〜すいと上らつしやい、白眼坊もまアとにかく上らつしやい。これから嵯峨までは歸られまい、今宵は此寺へ泊るが好いわ。」

「歸るにはわけはないことぢやが、其客を預け置いては迷惑かな。」

「まア一通りは此の人の住居も聞いて送り届ける工夫もせにやなるまい。あのやうに震へてゐては氣の毒や。早う爐のふちへござらつしやい。」大和尚は二人を庫裡へ請じて戸を閉ぢる。爐の火をかき起しながら、

「炭もつがう、湯も暖めよう。」と、もてなし振りをする。

「鴨川土手からこゝまでよう背負つて來さしたのう。」

「何の輕いわ。樂なこつちや。」

「流石は武家の果ぢや。殺人劍即活人劍。」

大和尚は盛に炭をつぐ、爐の火はばつと赤う映えた。

寒氣に閉ぢられて、震へてゐた藤野は次第に身内が暖まるので、やつと蘇生の思をする。爐の前では二人の出家人が湯を吸つてゐる。

「さあ、湯一つ飲むべし。」

「有難うござりまする。」

「定めし寒かつたであらう。どうして鴨川土手にござらした。」と大和尚は湯を進めながら尋ねる。

「はい、曲者に乗物ぐるみ河に投げ込まれましたので。」

「はてな、そりや怪しいことぢや。」

「此御出家がお助け下らずば、危く命を取失ふところでござりました。」

「そりやさうであつたらう。してこなたはどこのお人ぢや、どこの館に御率公なさる身ぢや。」と大和尚はじろく藤野を見ながら云ふ。

「細川前管領様の奥に仕へまする老女で。」と云ひかけると、白眼坊は爐に燃える火の光で、ためつすかしつしながら、

「さうさうぢや、藤野殿でござるな。」

と云はれて藤野も不審の眼をみはり、

「さう云ふ御出家は、どなたでござりまするのう。」

「は、ア名もないもので。」

「お隠しなされませるな、妾が再生の恩人。」と曲ぐきをもぐもぐしながら笑顔をつくる。老女の笑顔は冬の月で、凄じいけれど、世を棄てた出家人には之も睫毛の塵よりも軽い。

「どうやら妾も見覚えがござりまする。」と云はれて、白眼坊はからりと打笑ひ、

「遊佐七郎がなれの果ぢや。」

「おう將軍様の御内人。」

「それは昔のこと、今は天龍寺の托鉢坊主白眼坊ぢやわい。」

「おう、なつかしうござりまする。」

「は、アなつかしうもござるまい。ぢやが藤野殿、今宵の危難は早晚お前の身に降りかゝるべき禍の前兆ぢや。それでもまだ善う死ななかつたものぢやのう。」

發心の巻

捜索

孫二郎は酔も醒めて茫然として其夜遅くなつてから歸つて來た。八郎は待ち兼ねてゐて、

「藤野は如何致した。」と問ふと、面目無げに頭を掻きながら、

「鴨川べりでいづくへか見失ひました。」と答へる。八郎は急ぎ込み、

「そりや如何してぢや。」

「乗物は美事鴨川に投げ込みましたが、あの狸婆め、素早く逃げ失せましたと見えて、どこをどう探しても皆目見えませぬ。いやはや我ながら鈍なことだ。」

聞く八郎は齒噛みをなし、

「喜内も勦も捕へて置いたに、當の敵藤野を逃がしたは如何にも残念千萬、それものども河原に參つて早速に探して見よ。」と配下の人々に嚴重の沙汰を下した。此うなると孫二郎も安閑として爐のふちで夜を明かすこともならぬ。

「某も行って心當りを猶探して見ませうす。」と又人々とともに鴨河原を指して出で行いた。

内にゐた若菜も今宵のことが案じられるので、忍びやかに八郎のゐる奉行所へと音づれた。

「何、藤野を取逃がしたとのことにござりますか。あの孫二郎ではそのやうな間のぬけたことも致しませう。藤野が細川の館へ無事に戻つたとあらば、お前の身の上も危い。どのやうな難儀が到來するやらも知れませぬ。」と打案すれば、

「如何にも一大事なことに相なつた。まこと浮沈の瀬戸際であつたが、美事してやられた。もう八郎が最期であるわ。今一度探して見いと、ものどもには沙汰致し置いたが、頼みの綱はもはや切れ果てゝゐる。喜内勦を捕へたところで何にならう。細川殿赤松殿から將軍家に嗾訴に及ぶは必定。御臺様だとして山名殿だとして、某を救ふ途はあるまい。よし庇はうとなさらば、天下の大亂となるは鏡を見るよりも明かである。禍の根を絶たうとして、我から好んで、禍の渦巻に巻き込まれて、遁るゝことは叶はぬ。」と八郎も思案投首で、百方術の盡きたるに困り果てた。しばらくあつて、

「孫二郎が身を投げての頼みに火急の場合、ふと思案して、一舉に禍の根を絶やして、御臺様の安きを計らうとしたのは、あゝ返すくも不覺であつたわい。」と、吐息つきく云ふ。

「新造も退散した今日此頃、あの藤野を捕へて、糺明すれば、細川殿も赤松殿も手の出しやうはあるま

いと存じたるに、孫二郎のぶまから、えらいことになりましたな。」と、若菜の聲もうるんでゐた。如何にも藤野が逃げ果せたとあらば一大事である。八郎は藤野を捕へて糺明し、一切を將軍家のお耳に入れて、將軍家の決断を促し、幼君を御跡目に据ゑて細川赤松等今出川殿の御味方の鼻を明かさうと計畫したのである。然るに藤野が我手に入らずとならば一切の計畫が畫餅になるのみか、細川赤松からは將軍家に八郎の不法を訴へるであらう。此權力ある人々から直訴に及ぶと將軍家は一も二もなく其言をお聞きなさらねばならぬ。不憫ではあるが、八郎は打首か切腹か、二者、一つより外にない。薊と喜内とを捕へ得ぬならば、藤野への狼藉は曲者の所業と云うても済まされよう。しかし薊と喜内とを捕へた今日では、藤野への狼藉も八郎の指圖所業であることは知れてゐる。八郎はもう絶體絶命である。固より連れ添ふ若菜も同じ運命に陥らねばならぬ。探索に出て行つた孫二郎とても気が氣でない。

「あゝ酒を飲まずにあつたらば、あのやうな失策は致さず、美事手柄を致したであらうに。」と、しきりに後悔してゐる。炬火ふりかさして河原を探し廻つたが、藤野の乗物が無残にも水浸しになつて破損してゐる外には手懸りが無い。又悄然として立戻つて其由を八郎に告げる。

八郎の更に懸念したのは、若し藤野がまだ細川の館に行きつかぬとあらば、駕籠昇きの急訴もあつて

細川家からも赤松家からも、探索隊が出ようほどに、我が手のものにそれとなく心得させて、引上げねばならぬと、若菜を奉行所にとりめ、孫二郎一人を引連れて、河原へと罷り越した。

河原の小屋は寂然として死せるが如く立つてゐる。

「おい／＼起きぬか。」と、一つの小屋の外から呼ばはつたが、いづれもぐつすり寝込でゐると見えて起き出る風情も無い。

「若狭はゐぬか、丹波は起きぬか。」と、二聲三聲高聲に呼はると、

「誰だよ。」と、寢惚けた聲がする。八郎は直にそれを安本丹の聲と推した。

「安本丹であらうがな。丹波はどう致した、若狭はゐぬか。遊佐八郎が参つたと傳へよ。」と、云ふ聲に目醒めた若狭、

「旦那様でござりまするか。此深夜にどうしてお出でなされましたか。」と、若狭はのこ／＼と起き出てくる。

「いつやら汝どもに話してあつた細川家の藤野と云ふ老女を今夜捕へようと致して取逃がした。」

「それはいかい残念なこととござりましたな。私どもに仰せつけ下さらば、どのやうに致しても引つ捕へるところとござりましたのた。」

「此男が美事取逃がしたのだわい。」と、八郎は笑ひながら、孫二郎を見る。若狭は孫二郎の顔を爐の火影にすかして、

「おうあなたは赤松様のお役人、いたく威張りくさるお方でござらしたのう。」と、云はれて、孫二郎は苦笑しながら、閉口の體。

「参つたく。云ふなく。」と、ひどく情氣る。

「其藤野の行方を其方達念にそれとなく心がけてくれよ。」

「畏りました。旦那様あのいつやら押へました野分とやら云ふ女子、喜内とやら云ふ大男は、其後どう

なりましたか。逃げ失せて、もう捕まりませぬか。」

「あの兩人は巧みに縛めたわい。」

「それはお手柄でござりましたのう。又あの馬で逃げ失せるときのやうな面白いことが致したうござりまする。」

「藤野めを美事探し出してくれや。褒美はたんと出さうぜ。」

「心得ました。今宵は丹波は他の小屋に居りまするので、お目通りも致されません。」

「さやうか、よろしく頼うだぞ。」と、八郎が孫二郎と河原から歸路についたときは、冬の夜も曉方近く

寒さはしつくりと心に刻むやうであつた。

古 狸

「お早う。」と、朝には似合しからぬ鈍い聲が聞えた。庭を掃いてゐた老爺はそちらを見やつて、

「誰かと思や、安本丹やな。今日は朝早くから何しにうせた。やるものなんかはないぞ。ちと掃除の手傳ひでもせいや。」と怒鳴りつけると、安本丹はにや／＼笑つて、

「は、ア、そないに威張りくさるもんぢやないよ。己アこれでも今日は金儲けに歩いてゐるんや。」

「どないな金儲けや。朝早く歩いて、落ちてゐる草鞋でも拾はうと云ふのやらう。」

「もつと好い金儲けや。當ると福々長者になるんや。」

「河原者が福々長者になるとな。こりや面白い。」

「その時には河原者なんか已めにして、とつさん、お前を内に置いてやらうぜ。」

「えらさうなこと云うてけつかるな。まアそれよりも金儲けの筋を話して見ろや。」

「は、ア、やつぱり慾があらあ。話してやらうか。人探しや。」

「人探し。どのやうな人や。」

「婆さまや。」

「お前の母者人か。」

「うんにや、御大名に奉公してゐる御殿女中の老狸や。」

「何や古狸だと。どこの狸や、將軍塚の狸か、大文字の狸か。」

「細川様の古狸で、藤野と云ふ意地の悪い婆様や。」

老爺は少からず驚いた。昨夜此寺に天龍寺の白眼坊が背負つて来たやら云ふので、今朝ちらと見た婆様は今安本丹の話す古狸らしい。

「ふん、其婆様をお前どうして探すのや。」

「斯うや、とつさん聞いてくんろよ。遊佐八郎様と云ふお人が、昨夜、己達の小屋へ来て、其婆様が逃げ出したから探せい。探し出したものにはうんと褒美をやるとのことや。遊佐と云ふ旦那はえらい人や此前も細川様にゐた野分と云ふ悪い女を己達がかまへたとき、いろくの褒美をくりやはつた。其野分と云ふ悪い女はいつの間にも獄舎から逃出したげな。けれど、又昨夜其悪い女も喜内と云ふ細川様の大男も遊佐様がかまへたぜ。唯藤野の古狸がかまらねえのよ。己等がかまへてうんと褒美を貰はうと云ふのや。そこで今朝からみんな仲間の奴があちこち探してゐるのや。とつさんお前も探して見

ろや。褒美にありつくぜ。」と、安本丹であるから聞いたところをべらくと喋舌り立てる。

「さあこれから清水鳥邊山の方でも一廻りして探して来ようかな。ゐればよいが、ゐないと徒骨や。」と、獨語ちながら立ち去らうとする。

「これ待て。」と、縁の所から聲がかかる。すうと障子が開いて、そこへ立ち出たのは白眼坊。

「これ河原者待て。待てと申すに。」

「いつもの和尚さんとは違つてゐらア。どこの坊さんや、己に用があるんか。」

「大ありだ。」

「何の用や。忙しい己の身體や。ちやつと云うてくんろ。」

「お前に金儲けをさしてやらう。」

「古狸の在所を教へてくれるか。こいつア有難い。」

「待て。己が手紙を書いてやるからそれを持つて、遊佐八郎の處まで使ひに参れ。其婆様の在處がちやんと手紙の中に書いてある。」

「おつと来た。ちやつと書いてくんろよ。」

「待て〜。」と、云ひながら白眼坊は、中へ引込んで、

「和尚く。」と、大和尚を呼び、小聲になつて、

「愚柄の文字では弟にさとられていかん。貴公斯う云ふ趣意で手紙を一つ書いてくれ。」と、何やら口授する。やがて出来上つた手紙を持つて出で、

「河原者、此手紙を持つて遊佐の處まで参り、お前が案内して此寺まで連れて来い。」

「おつと来た。」と、手紙を取るなり、一目散に安本丹は駆け出した。

河原の小屋にも立寄り、安本丹は遊佐の奉行所まで息をもつかず、駆け行いて、玄關から、

「おうい〜。」と、呼ばはる。驚いたのは、宿直の役人、

「誰だ。高聲にわめき居るは。」

「金儲けが出来たんや。褒美を貰ふぜ。」

「何と申す。汝は河原者ぢやないか。」

「もう河原者ぢやぬえよ。福々長者や。」

「何、こいつ亂心致し居るか、それとも白痴か。」

安本丹は委細かまはず、懐かい探つて、

「驚くなよ。此手紙を遊佐の旦那に上げてくんろ。」と差出す。

役人も八郎が折々河原者を使つてゐることを知つてゐる。であるから、其手紙を受取つて、

「暫くこれに控へ居らう。」と、沙汰して奥に入つた。

八郎は受取つた其手紙の封を切つて讀み下し、

「は、ア、藤野の行方を知つてゐると云ふ密書ぢやな。こりや妙だ。早速来てくれよとある。しかしそれについては色々事情もあるから、野分と喜内とを召連れて来てくれよとある。又若菜にも同道ありたいとのことぢや。こりや怪體な。出家の身であるから、虚偽は少しも云はぬ、必ず懸念してくれるなとある。逢へば總てが分るとある。」

しばし不審の眼で見つたが、決然として、

「よし、参らう、其使者はいづれにある。」

「表へ控へさして居りまする。」

「行て逢はう。」と、玄關へ出ると、安本丹は朝日を背に受けながら、いゝ氣持にこくり〜と居睡りしてゐる。

「おう安本丹か、此手紙はどこから持つて参つた。」
安本丹は眼をこすりながら、

「旦那、褒美をくれるだらうな。」

「此手紙の旨に偽りなくば、遣はさう。」

「下河原のお寺から持つて来たんや。」

「誰が此手紙を手渡し致した。」

「坊さまが。」

「どのやうな寺だ。」

「あんまり綺麗な寺でもねえのよ。」

「さらば、汝が案内致すか。」

「案内するとも。」

「よし、さらば参らう。」

八郎は薊の野分と喜内とを乗物に乗せ、昨夜遅く館へ戻つた若菜をも迎ひにやつて、それをも乗物に乗せ、孫二郎初め七八人の配下を引連れ、自ら馬に跨つて、安本丹を案内として下河原へと向つた。

妙 一 尼

八郎は馬上で寺の門を仰いだ。

「大さうはあるが、餘りに立派な寺でもない。如何さま大分荒れて居るな。天龍寺の末寺であるよな。」

安本丹は先へ驅けて庭口へ参り、大きな聲で、

「和尚さん、連れて来たよ。」と呼ばはる。

納所の僧はそれへ出て、

「此方へお通り下され。」と、式代するに、八郎は馬より下り、乗物の中から悄然として出で立つ喜内と薊の野分とを引連れて誘はる。儘、本堂へと通る。引ついで若菜も打通る。孫二郎は遙か引き下つてきまり悪げにつき従ふ。本堂の縁先には配下のもどもが一同立並んで警衛する。

本堂はそれでも清く、禪寺の空氣がしんみりと裡に漂つてゐる。八郎も聊か五里霧中を彷徨ふ形でちつとも油断せぬ。すはと云はゞ配下のもものを指揮して急に應ぜんと、目と耳とを機敏に働かせてゐる。

喜内と野分とは何が何やらさつぱり分らず、殊勝氣に控へてはゐるが、これ又目をぎよる／＼させて若菜や孫二郎をすき見し、小さな音をも聞き漏らすまいとしてゐる。若菜は少し離れて折々は薊の顔を盗むやうにして見る。孫二郎は甚だ手持無沙汰の體たらくで、各人さまざまであるが、疑の雲はすべての胸の中を徂徠する。

やがて庫裡の彼方から人の足音がして、出て来たのは大和尚であつた。八郎と相對したところに坐つて、一體し、

「善うこそ御入來。愚衲が此寺の住持でございます。」

八郎は會釋して、

「先刻は御書面確に頂戴仕りました。細川殿の老女藤野の行方を御承知とのこと。彼はいつくに居りまするか。」

聞く喜内と劃とは少からず驚いてゐる。

大和尚は莞爾として、

「當寺に居りまする。」

八郎も驚いた。

「は、ア、御寺に居りまするか。さらば早速に御引渡しを願ひたい。して又如何にして御寺には参りましたか。」

「さる人が昨夜當寺に背負つて参つたのでござる。ぢやが御引渡しは難うござる。細川殿の老女なれば細川家に引渡すが願で。」

八郎は急ぎ込んだ。

「公儀より札問すべき儀あり、其行方を尋ねて居るものでござれば、早速に御引渡しを願ひたい。」

「そりやなりませぬ。但し其許が尋ねられて、河原者にまで其行方を探索方沙汰致し居るげぢやに依り一應其許へ探索無用との爲め御通知を致し置いたのでござるが、故なく御引渡しは出来ませぬ。まして此處は浮世を離れた佛寺、罪あるものも此に入りて懺悔を致さば減罪になる場にてござる。」と大和尚は頑として應すべき氣色もない。

「御通知は辱けなうござる。ぢやが某に御引渡しあるつもりで御通知になつたのではござらぬか。某はさ思うて推參仕つてござる。」

「は、ア、そりや遊佐殿、氣が早まり過ぎます。御引渡し致さうとて通知は致さぬ。在處をお知らせせうとて、通知致したのでござる。」

「して御通知あつたる上は、細川殿に御歸しになる御了簡にござりまするか。」

「先づそのやうな心算で。」

「よろしい、御通知の旨は諒承致してござる。此上は某の力にて召捕ります。お妨げなされませぬ。」と、八郎はつと立つた。座中の人々は一樣に電氣に打たれた如くびくつとした。

「そりやなりませぬ。佛寺へ亂入は法度でござるぞ。」
 「寺内では召捕りませぬ。寺から追ひ出すまでござる。」と、八郎はもう破れかぶれと決心の臍を固めて、

「ものども、用意を致せ。」と、外の方へ向つて聲をかける。縁先にゐる配下の人々は、ばら／＼と寺の前後に立別れて、すはと云はゞ、亂入せんと手ぐすね引いて待ち受ける。

八郎は二足三足進んだ。喜内と薊とは思はず立ちかける。孫二郎は喜内と薊とを取つて押へんと身構へする。唯若菜のみは寂然として身動き一つだにせぬ。

「遊佐八郎控へ居らう。」と本堂を揺り動かすやうな聲がぐわんと響いた。人々はあつとばかりに驚く、八郎も愕然として立止まつた。足音ゆるやかにそこに現れて、すつくとばかり八郎の前面に立ちはだかつたは、一人の頭陀であつた。

「何を、八郎呼ばりは無禮であらう。」と、八郎はきつと、其顔を仰いだか、忽ちそこへどつかと坐つた。

「これは兄者人、代り果てたお姿でござりまするな。」

「汝は佛寺を何と心得居るぞ。」

「はつ、恐れ入りました。ではござりまするが、細川殿の老女藤野はまこと此御寺に居りまするか、そ

れをお聞かせ下されませ。」

八郎は兄の姿を見て、すべて計られたと思つたのである。七郎の白眼坊は、首を掉つて、

「藤野と申すものは居らぬ。」

「さればこれなる和尚殿は某を欺かれたのにてござりまするか。」と八郎はきつとなる。

「藤野は居らぬ。ちやが妙一尼と云ふものが居る。逢はせて遣はさう。」と、白眼坊は奥に向つて、

「妙一尼／＼。」と呼ぶ。

「はアい。」と、長い返事をしてそれへ現はれたは一人の老尼。見ると、これは如何に、藤野が髪剃つて墨染の衣着けた姿である。一同之を見て、

「これは如何に。」とばかり呆氣に取られる。

大 夢

七郎の白眼坊はやをら椅子に腰をかけ、一同を見渡して、えへんと一つ咳拂ひ、

「各々が其主に盡す志は殊勝であるが、物の理非を辨へず、偏に主の悪事を増長させるを知らぬはまことに以て沙汰の限りであるぞ。主の悪事を増長させるのは畢竟其主を滅ぼす源とは知らぬか。主を滅

すのみか我身を亡す。主を滅し、我身を亡すばかりか、天下國家の大亂を醸し、民百姓を塗炭の苦みに陥らすを曉らぬか。愚かな人達ぢや。御臺所はちとばかりの才あるに任せて、權勢を我が身に得ようとの妄執の念を起し、足利御一門の滅亡、天下の支離滅裂に至る勢を増長させた。八郎夫妻は之を謀むることをなさず、一圖に其非望を増長させるを忠義と心得て愈々御臺所の増上慢を助けたるは、天下國家の大賊とも言ふべきである。細川前管領殿は智慧者と呼ばはれてゐるが、權勢の奴となつて、其智慧の鏡もはや曇つてござる。妙一尼の前身藤野は女の似而非利口で、前管領殿の非を助けて足利御一家天下國家に少からず禍害を醸した。赤松殿も畢竟權勢利欲の塊り、山名入道などになつては言語道斷ぢや。此等權勢利欲の亡者どもを助けることが何で忠義であらう。不憫なるは民百姓である。今に見よ、世の中は妖魔惡鬼の躍るに任せて、天地は常闇となると知らぬか。」

是に至つて白眼坊の聲音は此世の人とは思はれぬ。譬へば神の御使か、阿羅漢佛菩薩かの出現のやうに覺えた。

「御臺所もおいたはしや、我と我身を苦め我心を苦めて、終には惡鬼羅刹と化せられるであらう。山名入道、細川前管領、赤松、兩畠山、兩斯波殿以下の殿原も皆大鬼小鬼となりて此世から畜生道に入るゝであらう。其惡鬼羅刹大鬼小鬼を助ける汝達はいづれも夜叉魍魎の眷屬であるぞ。妙一尼は昨夜よ

り愚禰が事をわけての物語に、今までの非を曉り翻然として佛の道に入つて其身の苦患を助けようと、墨染の衣には代へたるぞ。八郎若菜は如何にか思ふ。喜内野分とやは如何にか思ふ。そこにゐる男も亦何とか思ふ。」と、其聲は森嚴であつた。一同は言句さへに出ぬ。藤野の妙一尼はやをら藤行出で、「遊佐七郎殿の白眼様に助けられて、昨夜此御寺に参り、さまざまの有難い御訓をお聞き申して、やつと六十年の非を知りまして、後世が空恐しくなりました。昨日もそこなる野分が畠山右衛門佐殿とちとばかり知り合ひなるを便りに、好い加減の用を事づけ、それとなく、様子を探らせ、妾自ら赤松殿の館に参り、野分を使つて、佐殿を毒害しようと思つて、其歸るさに、もう少して一命を落とすところまでござりました。妾の前の身はもうあの折に死に亡せたので、今日からは生れ變つて佛に事へる妙一尼。あゝこれも全く白眼様の尊い御さとしのお蔭にござりまする。」と、云ふ其聲も其顔ももう元の藤野とは思はれぬほどであつた。

聞く孫二郎は意外な面色。

「藤野殿いやさ妙一尼殿が赤松殿の館にお出でなされたは、某をあやめる爲めではござりませんでしたか」

妙一尼は冷かにそなたを見て、

「何で汝などをとやかく致さうとて、わざ／＼赤松殿の館に参らうや。」

「こりや思ひ違ひを致しました。」と、孫二郎は頭を掻く。白眼坊は半眼を閉ぢながら、

「世の中には誤解もあり、讒誣もある。自ら鬼を畫くもあれば、蛇となつて人にまつはることもある。邪推もあり、疑もあり、便佞もあれば詔諛もある。皆心に妄執があるから、佛とならうとしても容易になれぬのぢや。頭を丸め入道などと名をつけて、夢窓國師の行跡を慕ふなどと云ひながら、心は利欲の囚はれとなり、賢人を妬み能あるものを嫉んで、我から好んで權勢の餓鬼道に陥るものが少くない。將軍様を彼是云ふは恐れあれども、世の取沙汰するものがあつて、暗君庸君などと申すが、こりや怪しからぬことぢや。將軍様は名利權勢にはまこと淡泊で妄執の念がいたう薄くあらせられる。唯御決斷が足り申さぬ。餘りに人任せで、御自身にお手を下されることが無い。將軍様がしつかり在らせらるれば、御臺所の非望も遮ぎることが出来たらうし、前管領の我儘を抑へることも出来たらう。將軍様が餘りにどうでもよいと云ふお考へから政事に依怙最良が多く、權勢の亡者どもが唯跋扈するばかりになつたるは如何にも嘆かましい。臣たるものは君の非を諫めて君を善い方に導くのがつとめぢや。聽かれぬときは去つて、一身を潔くするばかりぢや。三代將軍の御世にも細川頼之殿の忠義が却つて將軍家の御氣に觸れて、暫し御勘氣となられた。満堂の蒼蠅掃へども去り難し、去つて清風を尋ねて禪榻に就くと、一詩

を賦して、閑地に就かれたが、やがて浮き雲も晴れて、明月の皎々たるを仰がれたこともある。よし一生を浮き雲に閉されて、明月を迎へぬとも、人間として、俯仰天地に對して愧ぢねば、それで本望ぢやわい。」と、頗る感慨無量の體たらく。やゝあつて、

「喜内とやら、野分とやらが唆かされて、幼君を殺さうなどと大それた企を致したとは聞いたが、幼君を弑し奉つたところで、それが何にならう。所詮は細川殿、今出川殿の自滅に過ぎぬ。又野分とやらは不義淫奔を致した罰が、いつ消えることであらう。追ては身を滅すか、乃至は長野將監の靈に惱まされ、日夜苦み抜いて擧句の果に悶死する時が來よう。」

喜内も野分もぞつとして、八斗の冷水を背から浴びせられたやうな感じがした。取別け野分は眞つ青になつて、そこに絶倒するやうに覺えた。思はず、

「あゝ悪うござんした。お許し下さいませ。今且から御弟子となりまして、妙一尼様のお側に仕へまするほどに、何卒御慈悲をお垂れ下されませ。」

孫二郎も翻然と悟つて、

「白眼様、其野分の薊の相手は長野將監の弟なる此孫二郎にござりまする。我と我身が苦しい今日此頃つく／＼御誨を辱けなう聞きました。私めも佛弟子の端にお加へ下されまし。」

喜内も、

「あゝ無智とは申せ、若君様を殺害し奉らうなどと大それた事を致した我身、幸ひ一人身の私でございますれば、今日から佛門に入つて、白眼様の御手助けを致し、水も汲みませう、薪も採りませう。」
大悟すると、本の性の善に還る人々の一念發起。八郎と若菜とは低首れてゐたが、此場の光景の壯嚴なるに感極つて、

「如何にも嘆かほしい世の様でござる。某どもの忠義もまこと足利御一家天下萬民に仇するのであつて見れば、いづれは報いの來ぬこともあるまい。どうぢや若菜、かねて汝とは堅く忠義を約束したが、今より後は汝とともに浮世を離れ人里遠き山の中、水のほとりに身を隠し、やがては兄者人の御弟子とならうではないか。」

「あい、善う御氣がつかれました。何の異存がござりませう。」と、若菜も心から同感を表した。

「健氣な人々の發心ぢや。其心根の十分の一、百分の一でも御臺所、前管領、赤松、山名入道、兩、島山、兩斯波が持つてゐたならばなア。」と、白眼坊は思はず嗟嘆する。

「如何にもう。」と、大和尚も感に堪へ兼ねてゐる。折しも一騎、寺の門に駆けつけて、

「遊佐八郎殿に火急の注進でござりまする。」と云ふ。

「何か。」と八郎は冷かに見た。

「兩、島山殿が出陣の用意とりん、洛中にて決戦とのこととござりまする。」と聞いて、白眼坊は、

「天下大亂の幕が開けよつたな。」と思はず天井を仰いだ。

縁先には安本丹が待ちくたびれたか大きな欠伸一つ、兩手をうんと左右に伸して、

「世の中は夢ぢや〜。」と、どこで聞き覺えたか、誰かの口眞似をする。

應仁

流

轉

大正十四年十二月十五日印刷
大正十四年十一月十五日發行

不許複製



發行所

東京市日本橋區本石町
振替口座東京二四〇番

株式會社
博文館

應仁流

轉

正價金貳圓

著者 笹川 隆 風

發行者 株式會社 博文館

右代表者

大橋 進 一

印刷者 櫻井 潔

東京市小石川區瀧口水道町四十六番地

(有印製株式會社印)

家作流一米歐



傑偵探

作 家 著	英 コ イ ル ナ 著	英 シ ヤ ハ ウ 著	英 シ ウ ニ 著	英 ナ ン グ 著	佛 ル モ リ 著	英 タ チ ト 著	英 リ ツ フ 著	英 ド コ イ 著	英 チ ヤ レ 著	英 ユ ル 著	佛 ル ブ 著
九 著	十 著	十一 著	十二 著	十三 著	十四 著	十五 著	十六 著	十七 著	十八 著	十九 著	二十 著
第一 短 篇 集	魔 界 の 秘 密	消 滅 の 謎	死 の 狂 想	義 賊 ラ ッ フル ス	呪 いの 牙	青 い 十 字 架	百 萬 星 島 武 法	古 城 の 怪 虎	謎 函 雨	密 偵 白 龍	虎 牙 龍 結
森 下 雨 村 編	延 吉 田 著	天 岡 著	田 爆 中 著	保 藤 著	淺 野 支 架 著	星 島 武 法 著	天 岡 著	森 下 雨 村 著	天 岡 著	保 藤 著	保 藤 著
村 謙 編	村 謙 著	村 謙 著	村 謙 著	村 謙 著	村 謙 著	村 謙 著	村 謙 著	村 謙 著	村 謙 著	村 謙 著	村 謙 著

ア ズ ム 著	ト ビ 著	ド コ イ 著	レ ウ 著	モ リ 著	ラ ン 著	ボ ラ 著	ル ブ 著	ヤ ノ 著	ウ レ 著	レ マ 著
三 著	四 著	五 著	六 著	七 著	八 著	九 著	十 著	十一 著	十二 著	十三 著
真 夏 の 秘 密	決 闘 の 秘 密	悪 魔 の 秘 密	迷 路 の 秘 密	十 一 の 秘 密	階 下 の 秘 密	黄 金 の 秘 密	八 角 の 秘 密	怪 鳥 の 秘 密	ノ ス の 秘 密	雙 生 兒 の 秘 密
小 酒 井 不 木 著	妹 尾 詔 夫 著	和 氣 次 郎 著	梶 原 信 一 郎 著	延 原 著	天 岡 著	吉 田 著	金 田 著	水 田 著	魔 井 著	和 氣 次 郎 著
木 謙 著	夫 謙 著	郎 謙 著	郎 謙 著	謙 著	謙 著	謙 著	謙 著	謙 著	謙 著	謙 著

ひ揃作傑の

書叢作

各洋各
册四六
價眞裝
金版口
壹繪美
錢圖四
圓頁本

佛 ス ト ル 著	英 ユ ル 著	英 マ フ 著	英 ハ イ ム 著	佛 オ ガ 著	英 コ リ 著	米 レ レ 著	米 レ レ 著	米 レ レ 著	佛 レ レ 著	佛 レ レ 著	佛 レ レ 著	佛 レ レ 著	佛 レ レ 著	佛 レ レ 著	佛 レ レ 著
九 著	十 著	十一 著	十二 著	十三 著	十四 著	十五 著	十六 著	十七 著	十八 著	十九 著	二十 著	二十一 著	二十二 著	二十三 著	二十四 著
幻 の 笑 話	暗 黒 の 秘 密	青 色 の 秘 密	日 東 の 秘 密	名 偵 探	呪 の 秘 密	囁 の 秘 密	地 下 の 秘 密	夜 の 秘 密	秘 の 秘 密	鎖 の 秘 密	鎖 の 秘 密	鎖 の 秘 密	鎖 の 秘 密	鎖 の 秘 密	鎖 の 秘 密
松 村 三 郎 著	松 村 三 郎 著	松 村 三 郎 著	松 村 三 郎 著	松 村 三 郎 著	松 村 三 郎 著	松 村 三 郎 著	松 村 三 郎 著	松 村 三 郎 著	松 村 三 郎 著	松 村 三 郎 著	松 村 三 郎 著	松 村 三 郎 著	松 村 三 郎 著	松 村 三 郎 著	松 村 三 郎 著
伊 夫 人 著	伊 夫 人 著	伊 夫 人 著	伊 夫 人 著	伊 夫 人 著	伊 夫 人 著	伊 夫 人 著	伊 夫 人 著	伊 夫 人 著	伊 夫 人 著	伊 夫 人 著	伊 夫 人 著	伊 夫 人 著	伊 夫 人 著	伊 夫 人 著	伊 夫 人 著
三 郎 著	三 郎 著	三 郎 著	三 郎 著	三 郎 著	三 郎 著	三 郎 著	三 郎 著	三 郎 著	三 郎 著	三 郎 著	三 郎 著	三 郎 著	三 郎 著	三 郎 著	三 郎 著
灰 色 の 男	灰 色 の 男	灰 色 の 男	灰 色 の 男	灰 色 の 男	灰 色 の 男	灰 色 の 男	灰 色 の 男	灰 色 の 男	灰 色 の 男	灰 色 の 男	灰 色 の 男	灰 色 の 男	灰 色 の 男	灰 色 の 男	灰 色 の 男
伊 夫 人 著	伊 夫 人 著	伊 夫 人 著	伊 夫 人 著	伊 夫 人 著	伊 夫 人 著	伊 夫 人 著	伊 夫 人 著	伊 夫 人 著	伊 夫 人 著	伊 夫 人 著	伊 夫 人 著	伊 夫 人 著	伊 夫 人 著	伊 夫 人 著	伊 夫 人 著
三 郎 著	三 郎 著	三 郎 著	三 郎 著	三 郎 著	三 郎 著	三 郎 著	三 郎 著	三 郎 著	三 郎 著	三 郎 著	三 郎 著	三 郎 著	三 郎 著	三 郎 著	三 郎 著

續刊

大佛次郎著

幕末鞍馬天狗

〔苜谷深陸裝幀〕

四六判上製函入美本
正 價金壹圓八拾錢
送料 八

〔伊藤幾久造裝幀〕

鞍馬御用盜異聞

四六判上製函入美本
正 價金壹圓八拾錢
送料 八

鞍馬天狗と名乗る覆面の劍俠、幕末の風雲裡にあつて縦横無盡に神出鬼没の活躍をなし、悉く近藤勇の新撰組と白熱的の對抗を爲し、筋索迫眞の筆に描寫せる妖女毒婦、血と涙と微笑とも見るを得ざる構想の妙、既成作家の何人も愈々好評重版を重ね遂に日活第一部超特作品として江湖の喝采を博するに至る。全篇に溢るゝ濃刺たる情新味は讀者の心を引き付けづには置かず、著者會心の大力作、文藝講談の粹として敢て一讀を薦む。

突如江戸に現はれし奇怪なる賊の一團、影の如く辻斬に、放火に、江戸市中の夢を嚇かす、大名の妾を掠奪し、柳營を一炬の煙に焚果して彼等何者ぞ？果然彼等を敵とし、既起せし蒼面の劍士ありて灼然せる殺陣場を生む、鞍馬天狗又渦中に在りて痛快の活躍を爲す、事件に纏絡する名妓の秘めたる戀、女の誇を奪はれて復讐の鬼と化せるお龍の奮める妖姿、幕末騒亂の姿相を描いて眞に肉躍り血湧りの感ある大雄篇、公刊と同時に日活映畫として現る好評喝采を待ちてひろく大方讀彦に薦む

大佛次郎著

幕末天狗騷動記

〔伊藤幾久造裝幀〕

四六判上製函入美本
正 價金壹圓八拾錢
送料 八

〔苜谷深陸裝幀〕

江戸艶説蟻地獄

四六判上製函入美本
正 價金壹圓八拾錢
送料 八

天狗騷動は幕府没落史上の悲壯なる一挿話作者は攘夷の壯圖を策して英波に據つた藤田小四郎、武田精雲齋等一團の志士の事跡を背景に、痛烈なる剣戟裡に展開する人間心理の種々相を描破した。純情多感の志士本木幾彌麗麗的に傲る女間諜お登勢、悪鬼の使徒能瀬與三八、可憐なる乙女お妙、四人の間に醸された不可思議なる四角關係は宛然繪巻もの、如く讀者が眼前に繰り擧げられる、是れ作者が會心の雄篇なり、映畫となりて愈々好評噴噴たり。

懸難なる現代から漸く忘れられて行く昔の江戸の名残り、人情本浮世繪の世界を幕地から蘇らせて、これに新しく香氣と色彩を加へ現代人の胸に通ひ易からしめたる十二の物語、ひたぶるなる美の渴仰、悪の讚美もすれば、時代を超えて人を動かす魂の輝きを傳へたものもある。多角なる近代の感覺を通じて描かれたる廢れし江戸の情調、咽び泣きたき絃のひとふしに如何に我等の心を揺るものあるかよ、情趣豊かに興味深き快麗傑作揃ひ。無聊の友は即ち本書なり。

國木田獨步著
刷縮 獨步全集

冊一全

獨歩は明治文壇に見る天才、時代に先んじて文壇覺醒の第一聲を擧げた、其全作品を通じて眞摯情新の氣魄が強く讀者の心を搏つ。

三六判上製函入
正價金參圓八拾錢
送料 十 八 錢

樋口一葉著
刷縮 一葉全集

冊一全

舊刊一葉全集前後二卷を縮刷して一篇に收め一葉女史の全面容を知らしめたるもの、小照及筆蹟四葉を巻頭に挿入して完美を期した。

三六判上製函入
正價金參圓八拾錢
送料 十 八 錢

齋藤綠雨著
刷縮 綠雨全集

冊一全

綠雨の文壇に於ける地位は獨特無二のものである。辛辣の譬句、洗練の行文、覺えず案を打たしめる小説隨筆がここに纏められた。

三六判上製函入
正價金貳圓五拾錢
送料 十 八 錢

長谷川四迷著
刷縮 二葉亭全集

冊三全

第一卷 うき雲、其面影、平凡
第二卷 あひびき、めぐりあひ、
くされ縁、うき草、片戀、
夢語り、獨太人
第三卷 ゴーゴリ、ゴードレキ、
ガルシ、ゴンドレエフ、
ホダアベンコ

三六判上製函入
正價各貳圓四拾錢
送料 各 十 錢

522

644

終